



# omnividens

【オムニヴィデンス】



## 東北地方における弥生時代中期の稲作文化—垂柳遺跡出土の土器

垂柳遺跡は、青森県田舎館村にある弥生時代の遺跡です。1956年ころ、地元の中学校教諭、工藤正氏が稲のモミ痕のついた土器を発見しました。これをきっかけに東北大学考古学講座の初代教授伊東信雄は、1958年に発掘調査をおこない、土器や石斧、石鎌のほか、焼米（炭化米）約200粒を発見しました。伊東は出土した土器の形態が弥生時代中期のものであることを確認し、津軽地方においてこの時期にすでに稲作がおこなわれていたと考えました。その後、1981年に水田跡が発見されたことにより、伊東の学説はさらに補強されました。下の写真は垂柳遺跡出土の炭化米（1粒4～5mm）。撮影：菊地美紀。



# リンネとビュフォン

## その1「植物の結婚」と性の体系



東北大学  
学術資源研究公開センター  
(総合学術博物館) 助教

小川 知幸

PROFILE

(おかわ ともゆき)

1970年生まれ

専門：ヨーロッパ中世・  
近世史、資料論、  
出版・メディア論

### 春のおとずれ

窓の外から遅い春の陽の光がさし込んでいた。その光のなかで一人の青年が机に向かって、一心不乱に書きものをしている。部屋のあちこちには整理途中の草木の葉や花卉があふれ、標本箱が所狭しと並べられている。壁には図鑑から切りとった絵図が無数に貼られていたが、その印象はどこか整然としていた。

(ついに、秘密を、見つけた……)

青年は掌に握った鷲ペンを何度もインク壺に運び、大きな紙の上に二本の鉢植えの絵を描いた。伸びやかに葉を広げ、笑顔の太陽から陽射しをいっぱいを受けている。そしてそのひとつの花卉のなかから花粉が風に乗って、もう一方の花卉へ

と運ばれてゆく。青年の顔は心もち上気していた。描ききった紙を満足げに二つに折ると、そこに手稿のタイトルをラテン語で大きく書きつけた。

「序説 植物の結婚 カール・リンネ」

### 二つの性

1729年、南スウェーデンのウプサラの町。カールは弱冠22歳の若者であった。牧師の家庭に生をうけ、当然のように跡を継ぐことを期待され、地元ルンド大学に進んだが、植物学への思いを捨てきれず、わずか一年でウプサラ大学に転学してしまった。

彼は自分の発見に興奮していたが、これが後に博物学の体系をすっかり変えてしまうことになるとは夢にも思わなかった。幼いころ遊んだ父のうつくしい庭園にはさまざまな草木や色とりどりの花々があふれていた。その名前をあっというまに覚えてしまう彼には、父でさえ舌を巻いた。スウェーデンには固有の姓がない。リンネという姓は、父が自分の進学のために考案したもので、セイヨウボダイジュを意味する、リンドLindenにちなんでいた。幼いカー

ルは、父ほど敬虔ではなかったが、生命の多様さのなかには、何か秘密が隠されていると予感していた。

彼はいま、植物に「神」の光がさし込むのを見た。その光は、人間にも動物にも等しく降り注いでいる。草花にも、人間と同様に、二つの性があることを知ったのである。おしべとめしべ。ここに植物分類法の本質があると彼は悟ったのだ。

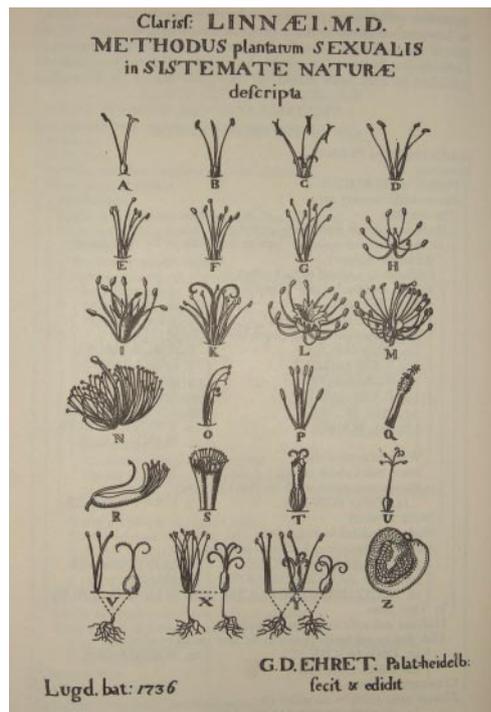
### おしべとめしべ

カール・リンネが、後に「性の体系」*Systema sexuale*と名付けた分類法はこうである。植物には、背丈や花びらの色やかたち、子葉の数など、さまざまな形質があるけれども、リンネの方法はそのなかから、ただ、生殖器官であるおしべとめしべだけを取り出し、その数をかぞえるだけで、植物界のすべての綱と目を判定するというものであった。

まず、おしべが1本か、2本か、3本かによって一おしべ綱、二おしべ綱、三おしべ綱にわけた。そしてつぎに、めしべが何本か(つまり、先端の分かれ方)によって、それぞれの綱を目に分類する。こうして、た



「植物の結婚」銅版画。1729年のリンネの原画をもとに後年つくられた。太陽が省かれ、春の西風(ゼフィルス)がつけかわえられている



「性の体系」の図解。おしべとめしべの数で分類している

たとえば、リンドウは「五おしべ綱二分めしべ目」*Pentandria-Digynia*に分類される。

もちろん、これまでも分類法がなかったわけではない。すでに前世紀にはいくつかの「科学的」な分類法が提唱されていた。しかしそれらは、種子を腑分けしたり、発芽させたり、複雑な花卉の形状を見分けたりと、専門知識なしには活用しにくいものであった。そのいっぽうで、古典古代の自然哲学の影響も根深かった。アリストテレスの畏友であり、哲学者であったテオフラストスのあらわした『植物誌』は、植物を高木・低木・草に分類して、高木を、より人間に近い高等生物としていた。

当然ながら、植物に生殖のための器官があるなどは、人びとの想像の範囲をはるかに超えていた。めしべは虫たちの寝室と食堂であると大まじめに主張した学者もいた。おしべは花のなかの不要物を「ほこり」として排泄するいやしい器官だと論じた者もいた。いずれも17世紀の終わりころ、リンネ直前の話である。

そもそも、おしべとめしべという呼び名自体が存在しなかった。おしべはラテン語でスターメン *stamen* というが、これは縦糸というほどの意味しかない。めしべにいたっては、ピスティルム *pistillum*、なんと「すりこぎ」である。日本でも、もともとは「しべ」(薬)とだけ言い慣わされていた。花を「統べ」る中心の意で(漢字を見よ)、性的なニュアンスはみじんもなかった。

だが、これらが生殖器官であることを発見したのは、じつはリンネ本人ではな

い。パリの王立植物園に勤めたセバスチャン・ヴァイヤンの貢献であった。彼は1718年にひとつの研究成果を発表した。花粉には、植物に生長する「もと」が含まれている。これをつくるおしべは、植物の繁殖にもっとも重要な器官である、と論じたのである。

### 神の叡智と恩寵

ここからリンネは、おしべとめしべが植物の分類にとって本質的なものと直感した。冒頭の「植物の結婚」に戻ろう。彼は、ややエロティックな筆致でこう記している。

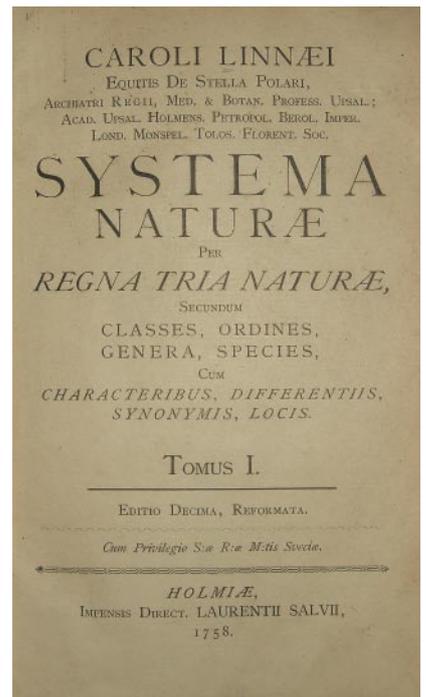
「そうだ、愛は植物同士にも芽生えるのだ。雄性と雌性、いや両性具有さえが、婚礼をひらき、性器をさらけだして雄・雌・両性具有の別をあきらかにする。花卉は真の生殖にはなんら役立たず、偉大な造物主が用意した花嫁の寝台の役割をはたす。この寝台が用意されれば、花嫁はいよいよ花婿を抱擁し、その身をすっかりとゆだねるときを迎える」。

受粉とは、すなわち植物の「結婚」にほかならない。そしてこの婚礼の儀式の支度をしたのは造物主、つまり神である。神の叡智と恩寵は、人間や動物だけでなく、植物にさえもあまねく満ちて、世界のすべてを司っている。この発見がリンネの受けた、いわば神の啓示であった。

### ロココの時代

数年後、リンネはまさに時代の寵児となっていた。手稿は印刷こそされなかったが、学生のあいだで回し読みされ、筆写されて、やがてウプサラの王立科学協会の知るところとなり、リンネは大学の教壇に立つことになった。1735年に学位を取得するため、オランダに留学すると、わずか6日で論文を書き上げてしまったといわれる。同年、有名な『自然の体系』*Systema naturae*を刊行する。彼はこれを終生改訂・増補しつつ、第13版まで刊行するが、その初版は、フォリオの大判とはいえ、たった11ページの薄手の著作にすぎなかった。(ちなみに東北大学附属図書館本館所蔵の『自然の体系』は、決定版とされる第10版の再版である。)

しかしリンネはこの初版に、彼の新学説、「性の体系」を掲げたのである。自分の思想の要点と、わかりやすい一覧表をつけて。



『自然の体系』第10版の再版(東北大学附属図書館本館所蔵)

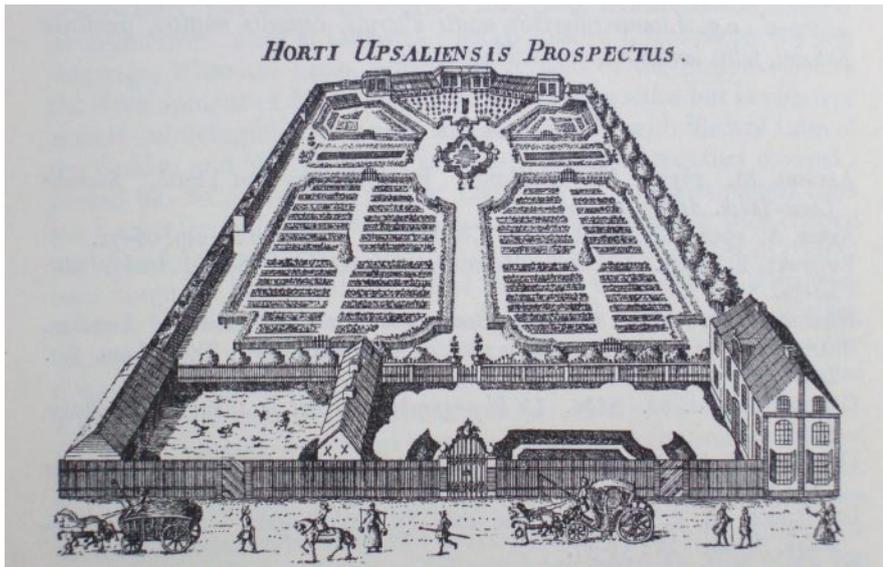
はじめ著作は学者のことばであるラテン語で書かれていたが、すぐにスウェーデン語、ドイツ語、英語、フランス語、オランダ語と、つぎつぎに各国語の翻訳が出た。そしてそれ以外にも、抜粋版、海賊版などが流布して、さらには図版入りの大衆向けも登場した。リンネ自身もまた、これにできるかのように、1737年には『植物の属』、翌年には『植物の綱』と、新たな著作を続々と発表していった。

人びとはこれらの本を、まるで待ち焦がれていたかのように、先を争って買い求めた。なぜか。18世紀の「啓蒙の時代」に、人びとは日々新たに入ってくるさまざまな情報や知識の洪水にさらされていた。新しい思想、新しい機械、新大陸の地理的発見、舶来のめずらしい物産の数々。そうした耳目をくすぐる新情報を整理・統合して、新しい時代の「知の体系」を一刻も早く作り上げなければ、と感じていたのである。

いっぽうで、貴族をはじめとする上流階層のあいだでは、穏やかな日常のなかで新しい文物を「愛でる」生活が普及していた。めずらしい草花や貝殻、化石、コインを集め、小鳥を飼う。庭園で、野山で、自然とともに午後のひとときを過ごし、読書し、夜はサロンで社交に興じる。華麗で洒落で享乐的な「ロココの時代」である。



リンネの名にちなんでリンネソウ *Linnaea borealis* L. の標本(東北大学植物園所蔵)



リンネによって改良されたウプサラの王立植物園(18世紀)

いまもヨーロッパの地を歩き、遺された宮殿を訪ねれば、かならずそこには広大な庭園が付置されていることに気づくだろう。草花の栽培もこの時代の熱狂の対象であった。とくにその主役であった女性たちは、おしべとめしべをかぞえるだけという、リンネのシンプルな分類法によって、じつに容易に植物の名称を知ることができるようになった。そしてまた、生殖器官による分類という、いわば「性の解放」を説くようなリンネの言い回しが、おそらく時代の雰囲気にも妙に合致していたのだろう。なぜなら、彼は、こうも書いていたからである。

「結婚には、すべての人にとってあきらかで、おおよげに祝福される結婚があり、

また秘密の結婚がある。そして、おおよげに祝福される結婚には、夫と妻とが同じ寝台で楽しむ場合と、別々の寝台で楽しむ場合があり、また、たとえば、ひとつの寝台に6人の夫とひとりの妻が同衾する場合などがあるのだ」。

言うまでもなく、これは、それぞれ顕花植物、隠花植物、両性花、単性花、六おしべ綱一めしべ目をさす植物分類法の謂いにすぎなかったのだが。

### ビュフォンの反論

こうしてリンネは、人びとから熱狂的な歓迎を受けると同時に、とくに科学者のあいだでは、批判的な態度で迎えらるることになった。その急先鋒の一人が、ジョルジュ＝ルイ・クレール・ド・ビュフォンであった。

リンネと同年のビュフォンは、やはり弱冠26歳でパリ科学アカデミーの会員となった俊英であり、パリ王立植物園総監としても、また、大ベストセラーとなった『一般と個別の自然誌』*Histoire naturelle, générale et particulière*全36巻の著者としても、つとに有名な人物であった。彼は言う。性急な体系化ではなく、「個別の事物の正確な記述と忠実な研究こそ、まず最初に定めるべき、博物学者の唯一の目的なのだ」と。

ビュフォンは、地上に満ちる動物、植物、そして鉱物などは、おどろくほど広大な光景を示し、しかもその多様な生物・無生物のちがいは感知できないほど微妙であるという。だから、そのような自然を前にして、自然の任意の一部分(植物の生殖器官)を選ん

で分類しようなどは、まったく理不尽きわまりない行為であった。彼は、個別の具体的な記述の積み重ねから全体に到達すべしと説き、みずから実践にうつしたのである。

ビュフォンの個別記述とは、たとえば、こんな具合であった。

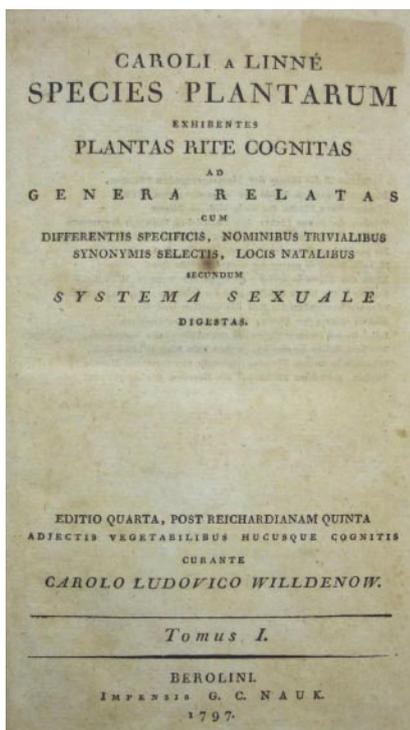
「ネコは根っからのどろぼうで、きちんと育てられたときにだけ、ペテン師のごとく従順でこびへつらうようになる。悪事をはたらく狡知や好みはペテン師と同じだし、小さな盗みをする性向も同じである。ネコは見せかけの愛着しかもたない。それは斜にかまえた動作やあいまいな目つきでわかる。ネコは自分のためだけに感情をもち、条件つきでしか愛さず、悪用するためにしか交際に加わらない。このように本性が一致しているため、ネコは、すべての点において誠実なイヌよりも人間とうまく共存できるのである」。

まるで文学であった。この饒舌と豊穣に人びとは陶醉し、ビュフォンを愛読した。こうして彼の著作もまた、人びとの受け入れるところとなった。だが、新しい知識が普及し、市民層が世の中の主役の座を占めるようになる、彼はしだいにうとまれていった。

### アンジャン・レジーム

18世紀末に革命運動が進行し、当時のフランス絶対王政がアンジャン・レジーム(旧体制)と呼ばれはじめるようになると、ビュフォンは旧い貴族文化の代表格として、あからさまに嫌悪されるようになった。『エミール』で知られる啓蒙思想家ジャン＝ジャック・ルソーは、ビュフォンには思想がなく、おしゃべりだと吐き捨てた。これにたいして、リンネには、「この世でこれほど高潔な人士をわたしは知らない」と最大級の讃辞を送っている。リンネもまた、1761年にスウェーデンで貴族に叙せられ、「フォン・リンネ」を名乗っていたにもかかわらず、である。

世間は一介の牧師の息子であったリンネを、敬虔さを兼ねそなえた市民の科学者であると考えていた。そして、その統一的な体系を、すべての自然を平等に神の光のもとにおくものどとみなした。リンネは『自然の体系』第10版に、満を持して「二名法」を記載した。「使徒」と呼ばれた彼の弟子たちは、世界各地に赴き、その成果を師のもとに送り届けた。その一人、カール・ツュンベリーは、1775年に長崎出島を訪れて、日本にリンネ植物学の種をまいていった。



リンネ『植物の種』第4版(東北大学附属図書館北青葉山分館所蔵)

## 勝利したもの

1789年5月、フランス革命が勃発した。リンネはすでに他界し(78年)、ビュフォンも革命の前年に鬼籍に入っていた。父の跡を継いだビュフォンの息子が、「市民の財産を盗んだ」かどで、怒り狂う群衆の前に引きずり出された。貴族であり、父がリンネの敵だったからである。ギロチンの刃の下に押し込まれながら、彼は、「市民諸君、わたしはビュフォンだ」と叫んだという。だが、その声は人びとの怒号のなかにかき消されていった。

翌年、ビュフォンの勤めていたパリ王立植物園の一面に建てられたもの、それはカール・リンネの胸像であった。(つづく)

### 主要参考文献

- ◎ *Caroli a Linné Species plantarum*, Editio quarta, Berolini 1797-1810.
- ◎ *Caroli Linnaei Systema naturae. Regnum animale*, Reprint of Editio decima 1758, Lipsiae 1894.
- ◎ *Supplementum plantarum Systematis vegetabilium, editionis decimae tertiae, Generum plantarum, editionis sextae, et Specierum plantarum, editionis secundae editum a Carolo a Linné*, Reprint (Originally published in 1781), 1936.
- ◎ *Species Plantarum*, a facsimile of the first edition 1753, London 1957-1959.
- ◎ ピエール・ガスカル(石木隆治 訳)『博物学者ビュフォン』白水社、1991年
- ◎ ヴォルフ・レベニース(小川さくえ 訳)『十八世紀の文人科学者たち』法政大学出版局、1992年
- ◎ 荒俣宏『増補版 図鑑の博物誌』集英社文庫、1994年
- ◎ 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本』(上・下)紀伊國屋書店、1999年
- ◎ B.C.ヴィッカー(村主朋英 訳)『歴史のなかの科学コミュニケーション』勁草書房、2005年



若き日のリンネの肖像画

## 企画展「土のけしき・土のふしぎ」を開催しました

総合学術博物館・東北大学大学院農学研究科・仙台市科学館共催の企画展「東北大学総合学術博物館のすべてⅩ土のけしき・土のふしぎ」が、仙台市科学館エントランスホールを会場として、3月10日に開催しました。開展式では、農学研究科南條正巳教授・仙台市科学館大串

秀夫館長のあいさつと、両氏とNPOゆいもりネット田邊いづみさん・愛知絢子さん、NPO地域・大学連携機構阿見孝雄さん・池田正子さんらによるテープカットのあと、南條教授の案内で内覧会をおこないました。ズラリとならんだ10本のモノリス(土壌はぎとり) 標本は圧巻で、参加者の大きな

興味を呼びおこしたようです。

この企画展は、私たちがいつもなにげなく接している土に焦点をあて、「モノリスで土をみる」「宇宙から見た土」「自然のちから+人間のちから」「土と助け合う生物」の4つのセクションの展示をつうじて、土の意外な“かお”を紹介しました。



## 自然史標本館の今年度入館者が15,000人をこえました

総合学術博物館が共用する自然史標本館の今年度の入館者数は、2008年10月11日に過去最高の11,082人をこえ、その後も順調に増加して、2009年2月24日に15,000人を突破しました。15,000人目の入館者は、千葉県松戸市からお見えに

なつた小田島信さんご夫妻で、自然史標本館にはふらっと立ち寄りられたとのことでした。総合学術博物館ではこの記念すべき節目にあたり、お二人にささやかな記念品を贈呈しました。



## 人類史ミニ展示「先史学フロンティア——東北大学からの発進」の開催期間を延長しました

総合学術博物館では、昨年12月9日より今年3月末まで開催した人類史ミニ企画展「先史学フロンティア——東北大学からの発進」の公開を好評につき延長いたしました。

本展では、自然史標本館2階のミニ展示スペースを、①「日本の始源文化を発掘する」、②「縄文文化の解明を目指して」、③「東北の稲作の起源を探して」、④「先史時代の人骨にメスを入れる」の4つのコーナーにわけ、旧石器、縄文、弥生、古人骨のそれぞれの文化の解明にあたって東北大学の研究者たちがはたした先駆的な役割を、300点をこえる豊富な資料群とともに紹介しています。今回出陳した資料には本邦初公開のものや重要文化財級のものも含まれ、いずれも貴重な資料ばかりです。

①「日本の始原文化を発掘する」として旧石器文化の研究を紹介するコーナーでは、本学考古学研究室の主任教授であった芹沢長介(1919～2006年)の業績を取りあげ、芹沢の前期旧石器時代(10万～3万年前)の研究のきっかけとなった、大分県早水台遺跡から出土したチョッパー(礫器)から新潟県中林遺跡出土の晩期旧石器時代の有舌尖頭器までの資料を展示しています。また、芹沢の発見した、

こけし形石製品(写真1)は「旧石器時代のヴィーナス」と呼ばれ、日本とシベリア地方の北方文化を結ぶ重要な出土品です。

②「縄文文化の解明を目指して」のコーナーでは、全国的な縄文土器編年を整備して、科学的な研究手法の確立に大きな功績のあった、医学部解剖学教室副手として在職した山内清男(1902～1970年)を取りあげています。1937年に山内が作成した編年表は、現在も基本的に継承され、その土台となっています。展示品の一例としては、おおよそ50cmをこえる大型の深鉢形土器を6点、また小型で精緻な装飾をほどこした注口土器などを6点陳列して、その形状や文様の変遷をご覧いただいています。なかでも青森県の亀ヶ岡遺跡で出土した高坏(写真2)は、江戸時代に発掘され、津軽藩主に献上されたいわくつきの土器であり、大変めずらしいものです。

③「東北の稲作の起源を探して」のコーナーでは、弥生時代にも早くから東北地方に稲作の文化があったことを証明した、本学考古学研究室初代教授・伊東信雄(1908～1987年)の業績を取りあげています。伊東は「東北の考古学の父」と呼ばれ、多賀城跡や陸奥国分寺跡などの東北地方を代表する遺跡の多くを発掘しました。青森県垂柳遺跡での発掘では、東北地方の稲作文化を解明しました。宮城県では、仙台市の南小泉遺跡を調査し、稲モチがついた弥生式土器や稲の



会場の様子

穂刈をする石包丁などを発見しています。ここではとくに、弥生時代の優美な円田式土器を展示しています。

最後に、④「先史時代の人骨にメスを入れる」のコーナーでは、本学医学部解剖学教室の長谷部言人(1882～1968年)、本学地質学古生物学教室の松本彦七郎(1887～1975年)の業績とあわせて、現在の最新研究からわかる縄文人の病気について展示しています。岩手県中沢浜貝塚出土の女性人骨(写真3)には、手指の融合や足首の関節の骨増殖などの異常がみられ、リュウマチ性の疾患か遺伝性の疾患がうたがわれています。

東北大学の研究者たちは、過去においても現在においても、つねに学問の地平を精力的に切り拓いてきました。その学問は、東北地方から全国、そして世界へと「発進」します。みなさまには、この機会をお見逃しなく、本展をご観覧いただけますようお願い申し上げます。



写真1. こけし形石製品「旧石器時代のヴィーナス」  
撮影：菊地美紀



写真2. 亀ヶ岡遺跡出土の高坏



写真3. 中沢浜貝塚出土の女性人骨

# 「先史学フロンティア ミュージアム・トーク2009」を開催しました

総合学術博物館では、本年度公開講座として、ミニ展示「先史学フロンティア」の開催にともない、2009年2月21日から3月14日までの毎週土曜日に自然史標本館において「先史学フロンティア ミュージアム・トーク2009」を開催しました。以下に各回における講演内容の要旨を掲載いたします。

## 第1回(2009年2月21日) 「サハリン調査、その後の70年」

東北大学大学院文学研究科教授 阿子島 香



日本考古学・古代史研究に多くの業績を残した、本学考古学研究室初代教授の伊東信雄は、1933～34年に樺太(サハリン)に渡り、考古学的調査をおこないました。阿子島教授も2000～01年にサハリンに出かけ、サハリン大学A.A. ワシレフスキー教授(2002年本学総合学術博物館客員教授)の案内で、伊東が当時踏査された遺跡を廻りました。

講演では、これらの遺跡が現在どのような状況になっているか、ロシア名ではいかに呼称されているか、また、サハリンで伊東が設定された土器の名称や編年観が今でも使用され、資料の基準となっていることなどを解説し、さらに、本学大学院文学研究科考古学陳列館に収蔵されているアイヌ甲(よろい)に類似する資料がサハリン博物館に展示されていることも紹介しました。

## 第2回(2009年2月28日) 「山内清男博士が編んだ縄文文化の時間」

東北大学大学院文学研究科研究助手 市川 健夫



やまのうちのすむお  
山内清男は、遺物の分析から当時の人の営為をさぐるという行為を科学的に貫徹した研究者です。講演では、山内が松本彦七郎の土器文様の分類や層位学的方法を積極的に導入し、全国に散在する多様な土器群の様相に対してその秩序を与えることで、縄文文化研究の道筋を作ったことをわかりやすく話されました。とくに宮城県大木圍貝塚、岩手県大洞貝塚の発掘でえられた資料を使用して東北地方の縄文土器編年をおこなったこと、その時間的尺度、研究方法、概念、枠組みがどのようになされたかなどを説明し、また、本学の喜田貞吉とのミネルヴァ論争にみられる、当時の日本考古学における常識や体質を紹介して、山内がその後の日本考古学に縄文土器研究のあり方や指針をどのように示したかを説明しました。

## 第3回(2009年3月7日) 「骨に語らせるということ」

東北大学大学院医学系研究科助教 瀧川 渉



大正から昭和初期にかけての約20年間(1914～1938年)、東北帝国大学には気鋭の人類学・先史学研究者が2名在籍していました。医科大学解剖学教室の長谷部言人と、理科大学地質学古生物学教室の松本彦七郎です。講演ではこの二人の活躍ぶりにスポットをあてて、当時の研究の流れを解説しました。

長谷部は、医学部で培ってきた肉眼解剖学と形質人類学を基盤に、現代人の身体的特徴のあり方や遺跡から出土する石器時代人骨の形態の分析などをつうじて、日本人の起源に関する当時の考え方に一石を投げ、新たに「変形説・移行説」を提示しました。教授就任後は、副手に山内清男を迎えて各地で発掘作業を実

施し、土器や骨角器、動物遺体といった考古遺物からも当時の人類活動に関する手がかりをえようと奮闘しました。

松本は、動物分類学を出発点に、初めて詳細な土器の型式分類を試み、その紋様構成の系統について進化論的な新しい見方を示しました。また、地質学における分層発掘の方法を取り入れ、堆積層によって土器の紋様・厚さ・器種の構成比が異なってくることを見出し、日本最初の層位学的な研究を実施しました。石器時代人骨や古人類、ゾウなど大型哺乳類の化石研究にも精力的に取り組みました。

## 第4回(2009年3月14日) 「旧石器時代を切り拓く―芹沢長介教授と日本の旧石器時代研究―」

東北大学総合学術博物館教授 柳田 俊雄



芹沢長介は1949年に岩宿で発掘調査をおこない、日本に旧石器時代が存在することを証明しました。以降、芹沢はつぎの四つのテーマをかかげて研究をすすめました。①旧石器時代の編年を探る研究、②縄文文化の始源を探る研究、③日本列島の最古の人類遺跡を探る研究、④石器の機能を探る研究です。

講演では、芹沢が東北大学に赴任する前の後期旧石器時代遺跡の調査、本学赴任以後の前期旧石器時代遺跡の発掘等を紹介し、その資料について説明しました。研究を進めるにあたって、芹沢はつねに遺跡を発掘調査して資料を獲得し、層位的に出土したものを基準に観察・検討することの重要性をも説いていました。このような方法で構築された日本旧石器時代の編年観やその特色がどのようなものであったかについても解説しました。

東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館  
I n f o r m a t i o n



## セルゲイ・ミロノフ ロシア連邦院議長が 自然史標本館を訪問

ロシア連邦院(上院)のセルゲイ・ミロノフ議長ほか11名が2009年1月16日に理学部自然史標本館を訪問されました。井上総長による歓迎のあいさつのもと、永広館長が館内の資料標本について説明をおこない、議長は熱心に聞き入っておられました。ミロノフ議長は、レニングラード鉦

山大学地球物理学部を卒業されたあと、旧ソ連地質学省に地球物理学者として勤務された経歴があり、産学官連携によりロシアとの交流を促進している宮城県を訪れられたさい、とくに自然史標本館の訪問を希望されたものです。



## フランス・リヨン高等師範学校オリバー・ファロン学長が 自然史標本館を訪問

2009年3月12日、フランス・リヨン高等師範学校(ENS-LSH)オリバー・ファロン学長ご夫妻ほか3名が、大西 仁法学研究

科教授とともに自然史標本館を見学されました。ファロン学長は、法学研究科との協定覚書調印のために東北大学を訪れ

られたもので、永広館長が展示説明をおこないました。

## 理学部自然史標本館

### ●ご利用案内

総合学術博物館の建物については現在建設計画中です。理学部自然史標本館を共用しています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

### ●入館料

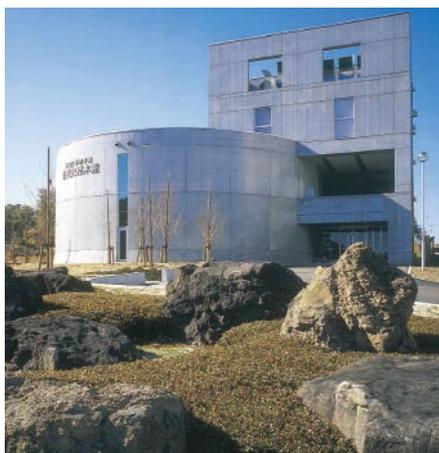
大人150円/小・中学生80円  
(団体は大人120円、小・中学生60円)  
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

### ●開館時間

午前10時から午後4時まで

### ●休館日

毎週月曜日(月曜日が祝日にあたる場合はその翌日とします)  
年末・年始(12月28日から1月4日)  
館内保守点検のため臨時に休館することがあります。



総合学術博物館の  
ホームページもご覧下さい。



東北大学総合学術博物館のホームページ  
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東 北 大 学  
総 合 学 術 博 物 館  
THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

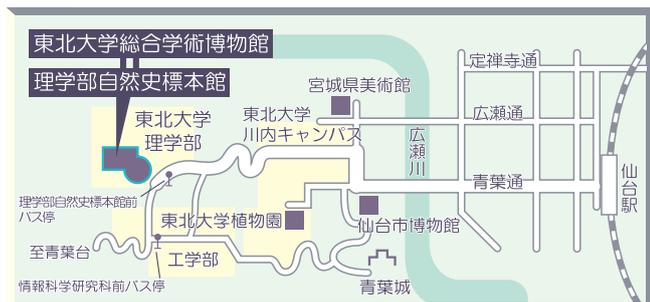
〒980-8578  
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3  
tel/fax. 022-795-6767

© The Tohoku University Museum

**Omnividens**

[オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



### ●交通手段

仙台駅西口バスプール  
9番乗り場  
所要時間約15分  
料金220円

- 青葉通・理・工学部先まわり動物公園循環理学部自然史標本館前下車徒歩1分
- 青葉台または宮教大または成田山行き情報科学研究科前下車徒歩4分
- 仙台市観光シティーバス「るーぶる仙台」も利用できます



この印刷物は適切に育まれた森から生まれたFSC認証紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています。